カトリック高松教区報

２０１３年９月８日（第１５６号）
発行所　カトリック高松司教区　広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：　yousei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

マザー・テレサの言葉

パンの形の中にキリストを見るように努めながら、わたしたちは一日を始めます。
日中は、貧しい人々の疲れた体の中におられるキリストに出会うために出かけます。

バチカン教皇大使をお迎えし式典

11月4日 高松教区設立50周年記念の集い

「高松教区設立50周年記念の集い」の式典は11月4日（月）桜町司教座聖堂で行われる。当日はバチカン教皇大使をお迎えし、第1部は「感謝」「希望」「賛美」の各テーマで催しがあり、第2部で派遣ミサがある。その後「若者と教皇大使の集い」も予定されている。当日のプログラムは次の通り。

〈集いプログラム〉
（12時30分開会）
・開会式・来賓紹介
・『感謝』（12時40分）
教区の振り返り
高松教区の歩み〈田中健一司教
・『希望』（13時10分）
希望の歌〈共に歩もう
子ども劇〔エマオの弟子〕
・『賛美』（13時45分）
キャッチフレーズ
これから一緒に行こう！
朗読と祈りによる賛美
（15分 休憩）
・『派遣ミサ』（14時20分）
・解散（16時00分）
その後、若者と天使の集い
（17時30分～19時）
通訳・Srギリス

・各小教区へは案内状とプログラム、式典で使用する「クレド・ドミネ」のCDと楽譜及びフリースペース・コーナー・聖具販売の案内を発送。
・ロゴマークについては巡礼教会用教会名入りスタンプ（左記）及び缶バッジ（400個）・ステッカー、Tシャツ（100枚）用（左記）を採用する。

・信徒の皆様へのお願い
「50年の感謝」と「今後、このような教会を目指した

高松教区設立50週年記念
小教区巡礼手帳を発行

司祭評議会で提案され、司祭評議会・教区宣教司牧評議会で採用決定された「小教区巡礼へのお誘い」手帳が完成し各小教区に配布済みである。
期間は来年8月15日までの一年間。
但し手帳記載の巡礼による全免償は信仰年閉幕の今年11月24日までであることに留意する必要がある。

勝谷太治師を 札幌司教に任命

教皇フランシスコは6月22日、ベルナルド勝谷太治「被選司教」（札幌教区司祭、57歳）を札幌教区司教に任命することを発表した。
札幌教区は地主敬夫司教（当時）の引退以来２００９年11月から新潟教区の菊池功司教が札幌教区管理者を兼任していた。
叙階式は10月14日午後2時から藤女子大学講堂にて行われる予定。

さいたま教区 谷司教退任

教皇フランシスコは、さいたま教区の谷大二司教（60歳）が、提出した退任願いを受理し、同時に、東京教区の岡田武夫大司教を、さいたま教区の教区管理者に任命した。
谷司教は２０００年９月15日、司教に叙階。
日本カトリック正義と平和協議会の会長や、司教協議会の社会司教委員会副委員長などを務めていた。

信仰年に寄せて③

宇和島教会担当司祭　田中正史

自分の決断で信仰宣言（クレド）

「だから、わたしは信じます」の信の構造について。
＝おん父の親心、おん子のへりくだった愛、そして聖霊の恵みのみ手＝

信徒の方であれば使徒信条を知らない人はいないと思います。しかしこのクレドである「信じます」は個々の信仰内容に対してすべて同じようにかかっているのでしょうか。また、このクレドは大きく分けて、おん父に対して、おん子に対して、聖霊に対して向けられていますが、おん父を信じることと、おん子を信じることと、聖霊を信じることは果たして全く同じなのでしょうか。今回はクレドの構造について考えてみたいと思います。

主日や祭日のミサでわたしたちが唱えている「使徒信条（クレド）」は次の12の信仰箇条によって構成されています。

① わたしは天地の創造主、全能の父である神を信じます。（ペトロ）
② わたしは父のひとり子わたしたちの主イエス・キリストを信じます。（アンデレ）
③ 主は聖霊によって宿り、おとめマリアから生まれ（ゼベダイの子ヤコブ）
④ ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて死に、葬られ、〔陰府に下り〕（ヨハネ）
⑤ 三日目に死者のうちから復活し、（トマス）
⑥ 天に昇って、全能の父である神の右の座に着き、（アルファイの子ヤコブ）
⑦ 聖者と死者を裁くために来られます（フィリポ）
⑧ わたしは聖霊を信じます（バルトロマイ）
⑨ 聖なる普遍の教会〔聖徒の交わり〕（マタイ）
⑩ 罪のゆるし（シモン）
⑪ からだの復活（タダイ）
⑫ 永遠の命を信じます。（マティア）

この信条はカトリック、プロテスタント、東方教会を問わずすべてのキリスト者に共通の信仰宣言で（ただし、〔〕部の内容は東方教会版には入っていません）その起源は受洗を願う者に要求された信仰宣言として8世紀に最終的なかたちが成立しました。この信条がもっている12の個々の事柄は、伝統的には12人の使徒たちそれぞれに帰せられ、イエスの昇天後聖霊を受けた12使徒がそれぞれ順番に12の条項を表明したとされていますが、このことに歴史的な裏付けがあるわけではありません。

クレド（Credo）はラテン語で「信じる」という動詞の一人称ですから直訳すると「わたしは信じます」となり、あくまでも一人ひとりが自分の信仰を自分の決断によって表明している点が大切です。一人ひとりの自由な信仰への決断が信徒の信条として内的なモチベーションを高めているところが教会の素晴らしさなのであって、教会共同体として「わたしたちは信じます」という単なる共同表明をしているわけではありません。ちなみに今企業の中では企業理念や社是の代わりにクレド、すなわち「企業の信条や行動指針を簡潔に記したもの」を導入する企業が増えていますが、これは「他者はどうであれわたしはどうするのか」という一人ひとりの社員の自主的な行動を促すためのようです。

さて、この使徒信条は大きく3つの部分によって構成されていて三位一体の構造になっています。
すなわち①は「父なる神」に対する信仰が表明され、目に見えないおん父の姿、思いとその愛をおん子であるイエス・キリストがはっきりと示してくださったことが宣言されます。それはたとえ箇条内容として明確には述べられていなくても、おん子の生きざまからみてそのことが含まれていることは明らかです。
そして②～⑦は「おん子イエス・キリスト」に対する信仰であり、おん子が具体的に私たちのためにどのように関わりながら救いを実現してくださったのかという歴史的な救いの出来事が表明されます。
最後に⑧～⑫では「聖霊」に対する信仰が述べられます。おん子を通して創設された救いは今やおん子の使命を委託された教会を通して、また聖霊の働きによって実現されているということが宣言されます。

これらの宣言の中で大切なことは、私たちの信仰は「私たちがまず信じる」ということに先だって、神のほうからさまざまな救いの出来事を実現してくださったからこそ、その出来事によって私たちが信じることが可能になったということです。特におん子を通して示されたおん父の姿、思いとその愛こそが私たちにとって決定的であり、キリスト教に特有の信仰観をもたらしています。

この使徒信条の3つの部分は、前回お話しした聖トマス・アクィナスによる「3つの信じる」にも呼応していることがわかります。
すなわち、おん父に対する信仰は「Credere Deo（神へと信じる）」であり、それは「天の父の親心とその愛、信頼に私たち一人ひとりが何よりもまず担われていて、私たちはいついかなる時にあってもおん父の愛の中に生きていることを信じる」ことです。
また、おん子に対する信仰は「Credere Deum（神のことを信じる）」であり、「神に創られたすべての被造物は、神のことばであり神の出来事となったおん子を通しておん父と出会い、おん子の贖いによっていかなる罪も赦され、おん父と和解することでおん父と一つになり、またすべての人の中にいるキリストと連帯することができることを信じる」ことです。
そして、聖霊に対する信仰は「Credere in Deum（神において信じる）」であり、「おん子の使命を託された教会が聖霊の働きによっておん父の愛を人々に示し、終局的な歴史の完成である神の国の実現に向かって神と共に歩み続けるために必要な聖霊のさまざまな賜物が私たちに必ず与えられていることを信じる」ということです。

おん父の親心をひしひしと実感しながら、おん子のへりくだった愛を通しておん父と出会うことが可能となり、おん父の愛そのものである聖霊という恵みのみ手に触れる、その現実の愛の体験が信仰告白としてほとばしり出ていることが使徒信条、すなわちクレド「だから、わたしは信じます」なのではないでしょうか。

はばたき

9月は秋もなかばの月で、『大気澄んでさわやかなころである』と歳時記にあるが、近年は暑さがガンガンの季節である。世はだんだん住みづらく、生きづらくなってきた。
9月10日は『日本２０５福者殉教者』の記念日。福者のひとりペトロ・パウロ・ナバロ神父をご存知だろうか。４２０年前のキリシタン時代、松山市の道後に教会と司祭館を建て四国で初めて、この地に住んで宣教した。
日本語にたんのうだった神父は人々に慕われ、話を聞くため教会へ多くの人が訪れた。これからという時、突然秀吉の「伴天連追放令」が発せられ、長崎・平戸へ追放された。
神父はその後、山口、豊後、長崎などで活動。１６１４年の大追放令の時、追放船に乗らず潜伏、34年間日本で苦難の道を歩んだ。
過酷な迫害下で山小屋や洞窟に隠れ、変装し夜中に長距離をキリシタンの住む地区から地区へ草履で歩いた。ミサや告解、聖体を授けるなど、信徒の信仰を守り励まし続けた。１６２１年島原で捕えられ翌年、「イエズス、マリア」と唱えながら火に焼かれ殉教。１８６７年ピオ９世によって列福された。
９月10日には、四国で宣教し証し人として死んだ〝聖なる人〟福者ナバロ神父がいたことを思い出してほしい。

小教区紹介
江の口教会（高知）

アットホームを目指して

高知駅北玄関口からはりまや橋方面を背に左方向に道をとり2分ほど歩くと、江ノ口教会の庭が目に入ります。折に触れ「江ノ口教会ってどんな教会？」との質問に、いつも返ってくる言葉は「アットホームな教会」、「決して派手でなく、地味でも揺るがぬ信仰を紡いでいっている教会」と。

今年は1月の横畠聖堂跡地での記念碑除幕ミサという、日本キリシタン史の１ページにも残され、証となる出来事で始まりました。

そして5月には故田中英吉司教様の没後30年を記念する行事がありました。

「横畠巡礼」は当教会日曜学校秋の遠足として、また、毎年2月10日は赤岡教会への「歩こう会」を行いました。浦上四番崩れ流人にまつわる多くの厳しくも美しい信仰談を学ぶ教会ぐるみの恒例行事でした。横畠の累代信者の墓前ミサは他の教会に籍を置く縁の人も、この日には知らせ合い、墓前での合流も意味あるものでした。

歴史再認識として「歩こう会」は久々に今年復活しました。歴史と言えば、毎年の大田美智子先生の講義は意味深く、聖書の世界の複線的意味を感じ、加えてその世界の「今」をも伝えていただきました。約20年間、毎年楽しみに大田先生を待ちました。そして、その講義は大変貴重なお話でした。

故土佐神父作　版画

今年春には隣接の「聖心の布教姉妹会」修道院が本部に引き上げられました。

手本となる証人（あかしびと）の姿を失いました。主にあっての修道者、そして多くの亡くなられた、切実に信仰を求めた信者の方々の軌跡を今、私達はどう生かすかに責務を感じています。どの教会にも言えることでしょうが、私達は先達の祈りと足跡によって今が支えられていることに気づきます。未来を見据える江ノ口教会は、歴史を深く心にいただこうと感慨を深めつゝ、静かに物想う観想する教会を目指しています。

『典礼奉仕』のために（20）
「正常なミサ」を管理すること

高松教区典礼委員長　レナト・フィリッピニ

司教座でのミサ、あるいは巡回教会でのミサであれ、また参加者が３００人でも10人足らずであっても、神によって呼び集められている神の民です、同じ神秘が祝われ、全く同じミサです。教会において「典礼は教会の顔」と言えるでしょう。だから私たちは定期的に、徹底的に典礼の環境、そのために使う祭具、参加者のやり方のチェックが必要でしょう。

２年の間、この欄で典礼とミサ、またそれに関する一人ひとりができることについて具体的に書きました。主にミサをめぐって、それぞれの観点、側面から「典礼的な診察」を提供しました。それに関する反響はよかったようです。“初めて気づいた”とか“目からウロコ”などの反応を多くの皆さんから頂いているからです。ここでもう一度確認してまとめてみましょう。

１・環境づくり（案内、照明、お花、音響など）
２・祭具の管理（杯とパテナ、祭服、侍者服など）
３・みことばに関すること（マイク、表敬、朗読聖書、外国語版聖書と典礼など）
４・会衆の参加

①ミサの前にざわざわしていますか。
②献金を集める時間を長く感じますか。（つまりそれは典礼を中断させている）
③お知らせの長さは3分を越えていますか。
④みことばが朗読される時、雑音も入っていますか。
⑤夏に入って、一日で枯れてしまう花。次の日曜日までそのまま置いてありますか。

以上の質問に対して「ハイ」と答えているなら、「異常」という典礼の診断結果になります。

つまりそれは、中途半端な式、だらしない流れ、しまりのない典礼になってしまうのです。もちろん、すべてが「ハイ」ではないでしょう。けれども、もし問題があったり気づいたことがあれば、即席典礼チェックをしてみましょう。

典礼委員会、評議会でも取り上げて改善していきましょう。典礼は多くの信徒にとって最高の信仰養成の場ですから、この信仰養成の場を大事にしなければならないでしょう。正常なミサ典礼を管理するためには、予算も会議も要らない。必要なのは一人ひとりが心をこめて力を合わせること。そうすればきっと正常「元気が出る」ミサになるに違いありません。

10件ほどの記事を編集しました。必要な方は遠慮なく電話やメールで請求して下さい。すぐ郵便やメールで送ります、（メール・アドレスrenato45@jg8.so-net.ne.jp）。

広島・高松教区司祭合同黙想会

「浦上四番崩れ」の受難に学ぶ

本部事務局長　西川康廣助祭

分かち合いのひととき

２０１３年６月２４日（月）～２９日（土）まで、カルメル修道会聖テレジア修道院において、恒例の年の合同黙想会をした。今年は広島教区（１１名）と高松教区（６名）の合計１７名が参加し、講師は長崎２６聖人殉教記念館長である、デルカ・レンゾ師のご指導のもとで「新しい福音宣教」をテーマに意義ある黙想会をすることができた。黙想の家は小高い丘の上に建てられていて、一角に広大な森があった。鳥の鳴き声が絶え間なく聞こえ、終始ゆったりした大自然の雰囲気の中で黙想会を過ごすことができた。

レンゾ師の講話は、午前と午後に夫々一回組み込まれ、特に江戸末期から明治初期の日本キリシタン史を題材に、新しい福音宣教について考えた。中でも日本２６聖人殉教者列聖（1862年）と２０５殉教者列福（1867年）は、日本の教会は迫害時代から隠れキリシタンの立場を長年間取って来たが、これを機に信仰表明の新しい時代への幕開けを期待する出来事であった。

特に長崎の浦上四番崩れの流浪先での厳しく、身もよだつような話をいろんな書籍を引用しながら聞かされた中で、わたしの心に最も深く印象に残ったことは、あらゆる苦しみの向こうに、神の開かれた御手を常に直視していた流浪先の子どもたちの生き様だった。次の話も忘れることができない。長崎へ帰還した人たちの生活も想像を絶する厳しいものがあった。たとえ家屋や土地や財産など、何もかもが信仰のゆえに失ってしまったとしても、決して取り戻そうとはせず、むしろこれまでともに歩んでくださった神の恵み深い、憐れみと慈しみに目を注ぎながら感謝のうちに日々を生きたことだ。言うならば今を生きることこそが、キリスト者の生き方だということに気づかされた。

黙想会から、同じくキリストに従う者として、現代社会の中でキリスト者であることを誇りとしまた公にして生きているか、子供たちに信仰の喜びと神に従う生き方を真剣に伝えているか、社会と共に特に小さくされた人たちと連帯した生き方をしているか、十字架を避けて生きてはいないか等を自問自答させられた。

2013年　高松教区修道女連盟総会・研修会
諏訪司教　教区50周年で呼びかけ

6月22日（土）四国カトリック会館に於いて、修道女43名の参加を得て開催されました。

午前中は昨年に続く西川康廣助祭による「聖書理解へのアプローチII」でしたが、限られた時間が残念と思われるほどの豊かな内容でした。続いて、諏訪司教様のご挨拶と「高松教区設立50周年」に向けてのお話でした。信仰共同体の養成という大きなテーマを目指しながら、信仰年を一人ひとりが自己の歩みを信仰の目で振り返り、その中での神の導き、はからい、呼びかけを黙想していくことの大切さを語られました。

また、私たちは頂いたこの信仰の恵みを共同体で話し合い、現実社会の中で何を基準にしたらよいのか、という問いに応えていくという大きな課題に挑戦していかなければならない、とも語られました。

午後は総会、会計報告、そして感謝のミサのうちに閉会しました。

Sr光藤幸子

昼食を摂りながら連帯を深める

神学生便り
日本カトリック神学院のシステム

哲学科2年　高山徹

いつもお祈りとご支援をありがとうございます。哲学科2年生の高山です。日本カトリック神学院東京キャンパスでの生活も2年目となりました。今回は、東京キャンパス事情について少しお話させて頂きながら、近況報告をさせて頂きます。

現在の日本カトリック神学院は、哲学科の2年間は東京キャンパスで、神学科の3年間は福岡キャンパスで、そして神学科4年生（助祭コース）は再び東京キャンパスで学ぶシステムになっております。助祭様方は、コースの学びをされながら、聖職者として、私達哲学科生の指導をして下さいます。哲学科1年生は、種々の学びや活動の中で、神学院生活へと導入されます。そして、私たち哲学科2年生は、引き続き各分野の学びを深めながら哲学小論文を執筆します。

土日には地元の各小教区に個別に実習に出かけるようになります。そして、神学院生活における種々の部門（典礼、消耗品、清掃等）での担当を持たせて頂きます。生活における種々の部門は、1年目は先輩の後に付いていれば何とかなりました。しかし、2年目は先輩のご指導を仰ぎながらも、ある程度自分達がリードすることが求められます。神父様方や助祭様方から立場・責任を頂き、それを実践する中で養成を受けていると思います。

未熟な自分は、必ずしもスムーズにいかないことが多く、学期中は皆さんにご迷惑をおかけしました。その一方で、沢山の支えと励ましを頂きました。そうした中で、昨年より人数の減少した東京キャンパスにおいては「みんなが協力していく」という雰囲気も感じ、嬉しく思っております。

何より、養成者の神父様方、職員の方々、そして神学院外の方々や沢山の方のお支えがあって、私達の神学院生活が成り立っていることを日々感じております。

学生会長と呼ぶにはまだまだ未熟な自分ですが、頂いたこの1年を恵みとして、感謝と喜びの内に“主と共に”“仲間と共に”歩むことができますようにお祈り下さい。

信仰年によせて
母の教えと祈りに導かれ

三本松教会を訪ねたのは8年前でした。洗礼を授かって3年目の私の信仰を顧みる時、幼少時代を思わずにはいられない。

父はフィリピンのルソン島で終戦の年に戦死しましたが、小さな白い木の箱ひとつしか帰らなかった。祖母、母、我が姉妹の残された小家族の支えは、我が家に伝わっていた幾つかの神々であった。毎日供え物を欠かさず、朝夕には手を合わせ、また出かける時、帰った時には必ず拝んだものである。私達の日常は神様仏様を心のよりどころとしていた。

母は体の弱い人であったが、戦後間もなく小さな衣料品店を始め、困難な日々を神様に依り頼み、支えられて仕事に励んでいた。母の仕事を引き継いだ私は時代と共に大規模店舗に移転し、地域のニーズに合う商品を提供できるよう、東京、大阪、神戸のメーカーを奔走した。

母は早朝の開店前を店に出向き、毎日祈ってくれた。50年間私が無事にこの仕事を終えられたのは母の教えと祈りに支えられたものであった。

母は90歳の誕生日を過ぎて緊急入院となり、その病院に神父様が幾度か来て下さり、母は喜びの中に洗礼の恵みを頂いた。その2ヶ月後の未明、静かに命を終えた。母の最期は何の苦痛もなく、じっと彼方を見つめた安らかで清らかな瞳は神様に出会ったと確信した。母の残してくれた神様への道を私も希望をもって歩みたいと思う。

私の受洗前の勉強に、「どのように祈ればよろしいですか」と問えば、神父様は「イエス様、あなたのことが、あなたの愛が分かるように」と祈りなさいと教えて頂いた。

みことばに親しみ日々を謙虚に従っていきたいと思います。

三本松教会
中谷美智子

広島司教区平和行事
平和を求めて祈り、歩く
松山教会　佐々木和雄

会衆に話されるタークソン枢機卿
左は通訳のビタリ師

8月5日、悠久の平和を求める人々がそれぞれに思いを携えて広島に集まった。北海道から九州まで全国各地から参集した人びとに混じって共に祈り、考え、行動できたことを喜び、共に感謝している。

愛媛からも参加することができた。分科会ではそれぞれに分かれ、「改憲について」の講演、「福島の証言」と題して二本松教会の信徒会長である柳沼千賀子さんから福島の現況について聞くことができた。差別と孤立の中で希望をもって支援活動を続けていることを、事例をあげながら支援の在り方についても語られた。また「アーサー・ビナードさんと平和を考えるお話し会」に参加するなど、それぞれに満たされた時間であった。

夕方近くなって雷雨。どしゃ降りの雨に原爆供養塔の周辺はそこここに水たまりができた。そんな中、祈りのつどいが始まった。前田万葉司教、日本聖公会中村豊主教による献水、「水のこころ」を合唱しながら見守る。灼熱の熱線で膚を焼かれた人は水を求めてさまよったことと重ね合わせるひととき。あれから68年が経つ。

アーメンハレルヤを歌いながら平和行進が動き出す。雨も上がった。所属教区のプラカードをかかげ、「核廃絶」「原発反対」など思いを込めたプラカードとともにギターを鳴らし合唱の声を響かせながら行進は進む。若者が多いことに力強さを感じる。終点の平和記念聖堂まで1600メートル。道行く人に平和の叫びは伝わっただろうか。

平和祈願ミサ。全国16教区から参加した人たちが教区ごとに紹介され、祭壇上に並んだ司教団の一人ひとりが紹介され、前田万葉司教の司式で始まる。

タークソン枢機卿（教皇庁正義と平和評議会議長）による説教はイザヤ書2章、ヨハネ書20章から引用され、暴力によって目的は達せられないこと、慈愛に満ちた平和の挨拶こそが恐れを払拭し和解をもたらすものであることを力強く語られた。英語による説教だったが訳文を見ながら平和への祈願を新たに核の傘に守られることの愚かさを思う。

雨にも負けず平和を求めて

参加出来なかった人たちから託された折り鶴を奉納する機会を与えていただいた。祈りを込め、希望を込めて折られた折り鶴を託されたことに改めて喜びを感じている。

若い力
WYD リオデジャネイロ大会
「だから行って、全ての人を私の弟子にしなさい」
ブラザー八木

日本巡礼団として、20名のスタッフ（私もその一員でした）、45名の青年、計65名が、ワールドユースデイ・リオ大会に参加してきました。キーワードは以下の4つです。

パパ様

このワールドユースデイ・リオ大会に世界からの参加者は300万とも400万人ともいわれています。その中には、新しいパパ様に会いたい一心で参加した若者も多かったと思います。パパ様のお話や説教には、いたわり、優しさ、温かさがあり、その中にも威厳がありました。教皇ミサの会場が突然変更になるというハプニングもありましたが、大きな混乱もなく過ごせたのは、このワールドユースデイ期間中、このパパ様の大きな愛に終始包まれていたからでしょう。

コパカバーナビーチでの教皇ミサ

親日派の多いブラジル人と そのおもてなし

ブラジルで訪れたサンパウロにしてもリオにしても、私たち日本人は歓迎されっぱなしでした。日本の国旗を持っているだけで、たくさんの人々（特に南米）が私たちと一緒に写真を撮ろうとし、親近感を持って近寄ってくれました。なので、道を歩いているだけで、たくさんの国際交流ができました。私たちはもてなしの方法をブラジルの方々から自然に学んだように思います。そして周りから、認められ受け入れられることがどんなに大切さかを体験しました。

2013-7-19～31
WYD Rio2013

「若者との語らい」

徒歩での移動中や、休憩や分かち合いの中で、たくさんの若者と短時間で深い部分で対話ができました。その中で、いじめられた経験がある何人かの若者がいて、それをバネに積極的に生きていこうとする姿がありました。今までの自分をふり返り、新たな今後を真剣に自分と向き合いながら歩んでいこうとする姿勢も感じました。そして、教会を大切にし、信仰心を深めていこうとする意欲も感じられ、彼らとの語らいは、私にとって、とても大きな刺激になりました。

リオのキリスト像

有名なリオ市内の丘に立つキリスト像は、夜でもライトアップされているために、一日中町の至る所から眺めることができます。ビルの合間や広く視界が開けたところから、また何気なく町を歩いているとき、丘の上にそびえ立つキリスト像が視界に入り、私たちを見守ってくれていることを意識せざるを得ません。そんなキリストから、勇気や力、お恵みを町にいるだけで四六時中感じることができる…、そんなリオの町で、世界中から若者が集まって信仰（親交）を深めたことは、とても意味深いと思いました。

同グループのメンバーと

平和を願って祈る 戦場の体験も朗読
桜町教会でコンサート

8月3日（土）桜町教会に於いて平和を祈るコンサートが夕方4時から行われました。

まず初めにキャンドルサービスがあり、平和を祈るローソクの火が人々に配られ、「アシジの聖フランシスコの平和の祈り」を全員で唱えてコンサートは始まりました。

第2部は戦場に於いて負傷した兵士の水もなく死骸の只中に放置された体験朗読があり、第3部はソプラノ、オカリナの演奏の後、「賛美の歌の」コーラスで平和の願いを込めた歌声が響き渡りました。お聖堂の響きにも助けられ、曲が持っているイメージが人々に届けられたと感じました。

平和を願うコーラスで始める

このコンサートを続けていく中で、平和への祈りが人々へ届けられることを願い続けていきたいと思います。

武田玲子

阿波踊りを体験し 沖縄のことを考える
徳島で「歌って踊って平和を語ろう」

今年も8月12日～13日カトリック徳島教会で「歌って踊って平和を語ろう！」が行われました。第一日目は、徳島の伝統芸能“阿波踊り”を体験し、参加者は少なかったもののお互いに交流を深めました。第二日目は、徳島県内外から約30名が集い、山田圭吾氏の『「沖縄から平和を考える」―基地のない沖縄―』について、その活動や体験のお話を聴き、沖縄のことを詳しく知り、学び、分かち合う機会となりました。

山田圭吾氏は、那覇市生まれで、現在、普天間基地のある沖縄市に在住し、沖縄についての歴史や現状を幅広く伝えていくために、色んな活動をされています。カトリック泡瀬教会（那覇教区）に所属されております。

お話しや資料・写真を通して、まだまだ私たちは沖縄のことを知らないことに気付かされ、私たちから見る沖縄と、沖縄から見る私たちとの視点に大きなギャップがあることを感じました。

沖縄では「出会えば家族」という感覚があるそうです。地理的には遠く離れていても、沖縄のことを心に留め、思いを馳せることを忘れてはいけないなと感じます。家族もそうしますからね。

今回も平和についてしっかり再考する機会になりました。大きなことはできないかもしれないけど、身近に起きる一つひとつのことに平和な気持ちで接していく…、その積み重ねが大きな平和への変化につながるかもしれない、そんな希望を抱かせてもらえる豊かなひとときでした。

ブラザー八木信彦

山田圭吾氏の熱弁に聞き入る

徳島の人々 中高生と出会いは神のお恵み
サレジオ会神学

毎年、夏のはじめに四日市サレジオの志願生は四国に参ります。

今回は徳島に行って参りました。11名の志願者と4人のスタッフは徳島教会に泊まらせてもらいました。

主任司祭の林神父様やオブレート会の八木ブラザーや信徒の方々の笑顔のおもてなしと美味しい食事に感動しました。さらにまた、今人気の徳島ラーメンが私たちのお腹と気持ちを満たしてくれました。そして鳴門の渦潮も歓迎してくれました。迫力があって凄い！けれども、今回の徳島訪問の目的は別のところにありました。私たちは高松教区の「元気を出そう、中高生！ミサ」に参加するために来たのです。志願生と同年代の一般の中高生との交流が大きな目的のひとつです。

7月15日、私たちは四国中の様々な教会から集まって来た中高生、徳島教会の信徒の皆さんと主日のミサをささげました。また、志願生による伴奏やミサの奉仕を行い、ミサ後には志願院のことを紹介するためのコーラスや志願生へのインタビューも行われました。

お昼を一緒に食べた後には中高生だけの集いとなりました。ゆっくり時間をかけて中高生と志願者たちは自分の生活とあり方について語り合いました。集いの終わりに楽しいビンゴ大会もありました。

今回の旅の沢山の体験を通して出来事との出会い、自然との出会い、人との出会いは神の恵みであると感じました。そして、神と出会う時になりました。神に感謝！

レー・ファム・ギェ・フー神学生（サレジオ会）

四国の子ども、青年とサレジオ志願生

ひと
『キリスト』のように生きたい
阿南教会
渡部康雄 さん（64歳）

控え目で優しい印象だが、いざという時にはとことん相手の立場に立って共に考えてくれる。阿南教会の評議会議長さんで、信者さんの方は「何でも引き受けてくれ、何をほっといてもやってくれる人。心の清い人」と全面信頼している。山間部に住み、自給自足の生活をなさっているが、何故そのような生き方を選ばれたのか尋ねてみた。

『元々都会よりも静かな田舎が好きで、焼き物の会社を辞め、次のステップを考えていた。インドへ旅行した時、インドにはヒンズー教の修行者で世間を捨て神に祈りながら一生を終える人がいる。お金も物も持たないで生きている。しかも一般の人々がその人達を支えている宗教的な国だと気付き、その人達の生き方に勇気づけられた。「自給自足の生活をしながら山の中でゆったり過ごしたい」という憧れを実現する確信も得た。

妻、厚子さんとはネパールで出会い、意気投合。結婚し、愛知の山村生活へ。最初は仏教・ヒンズー教の生き方をしていた。本を読み、アルバイトをし、焼き物をするという生活だった。その後、上勝町に移住。その頃、キリスト教の本を読み始め、キリスト教に目覚めた。カトリックのみ「ミサが最後の晩餐を受け継いでいる」と感じ、洗礼を受けた。

信者として、世俗的なものに惑わされない生き方をしたい。山中の生活は共同体に向かない。会議や組織的なものも苦手だが議長をやるようになり、共同体を活気づけることの大切さが分かってきた。

本当にやるのなら「イエスのように」という思いがある。しかし使徒のように生きるのさえ難しい。キリストの言われた清貧を実践するには価値観の逆転が必要だ。ここに来て自分の生活をもう一度見直したいと考えている』

神に導かれ様々な共同体の歩みに謙虚に協力していく中で、今を見つめ直そうとされている康雄さんの姿を美しいと思う。そしてこれからも阿南教会の大黒柱として私たちを支えてほしいと願っている。

阿南教会　筈島久子

医療のともしび（37）

人体と宇宙との関連は？

人間は古くから宇宙に何があるのだろうと考え、古くは肉眼で、そのあと望遠鏡による天体観測をし、近年電子的望遠鏡であるハッブル望遠鏡などを使用しています。月への到達、遠く離れた星への探査がなされ、多くの人工衛星が飛び交い、宇宙ステーションによる人間の宇宙滞在が始まっています。民間人を宇宙に連れていく会社ができ、宇宙旅行を楽しむ時代が到来しつつあります。

われわれ医療者は、患者さんの体を診て触れるとき、自然と尊敬の念が湧いてきます。なぜ人間の体の組織がこのような形をし、その機能があるのか、分かっている部分とまだ分からない部分があります。学問としての最終的な結論が出せないでいるのです。そしてそこが破綻すると病気の誘因にもつながります。医療者（人間）が治癒させ得る領域が増えてきたとは云え、限界点もあります。一方 医療者がもうだめだとあきらめたあと、 以外によくなるという現象も結構あります。そういった人体の不思議もあるのです。そのため私は人間を診ているとき、その奥に宇宙を感じることがよくあります。どんなに探索しても、最後まで全ての姿を現さないぞという強い意思を感じることがあるのです。この点が宇宙との類似点でしょうか？

神様は、宇宙だけでなく人間も創ってくださいました。そこに類似点があるのは当たり前かもしれませんね。

私事で恐縮ですが、６月末日に父親が急死しました。真言宗信徒でしたので、カトリックの考えはありません。遺言ノートがありました。そこには生まれ変わったら 宇宙を研究する物理学者になりたいと書かれていました。それをすれば、人間の心がなぜ卑しいのかがわかるからであると書いていました。父親の趣味は望遠鏡をのぞいた天体観測でしたので、そんなことを考えていたのかと驚きました。宇宙を観ることで人間を見ようとしていたのですね。私は 人間を診ることで宇宙を感じていたので、方向性は違っていても、人体と宇宙との類似点は同感だったようです。生前に父親と人間と宇宙について話をしたら面白かっただろうなと、今になって後悔しております。

坂出聖マルチン病院　整形外科　田賀谷健一

教区スケジュール

９月
1日（日）年間第22主日
8日（日）年間第23主日
10日（火）日本205福者殉教者（記）司祭評議会10:30
13日（金）聖ヨハネ・クリゾストモ司教教会博士　教区設立50周年記念日
14日（土）十字架称賛（祝）
15日（日）年間第24主日
16日（月）聖コルネリオ教皇 聖チプリアノ司教殉教者（記）敬老の日
21日（土）聖マタイ使徒福音記者（祝）　宣教司牧評議会役員会13:00
22日（日）年間第25主日　世界難民移住移動者の日
23日（月）聖ピオ司祭（記）秋分の日
24日（火）深堀敏司教命日
28日（土）トマス西と15殉教者(記)50周年実行委員会14:00
29日（日）年間第26主日

１０月
1日（火）聖テレジア（幼いイエス）おとめ教会博士（記）
4日（金）聖フランシスコ（アシジ）修道者（記）
6日（日）年間第27主日
7日（月）ロザリオの聖母（記）
12日（土）教区女性の会in松山
13日（日）年間第28主日
14日（月）体育の日
15日（火）聖テレジア（イエスの）おとめ教会博士（記）
18日（金）聖ルカ福音記者（祝）
20日（日）年間第29主日
27日（日）年間第30主日
28日（月）聖シモン・聖ユダ使徒（祝）

第41回教職員研修会
今 教会が考えていること
〈高松司教区幼稚園連合会〉

カトリック高松司教区幼稚園連合会（会長：諏訪榮治郎司教）主催第41回教職員研修会が８月日2日から3日、高知市の共済会館において『今、教会が考えていること』というテーマで開催された。四国４県12のカトリック幼稚園から約50名の教職員が参加した。

第１日目はアントニサミー・イルダヤラージ師の歓迎挨拶に続き基調講演が行われた。諏訪司教は講演の中で、「私と神の関係」について語られ、「神が望んだ。生きることは神の想いが生きること、私達は大きな愛に包まれている」という強いメッセージが込められていた。

第2講話『十字架のしるしをする意味』では、私達は神が創り、神が与えた。何故生きるのか。いろいろな出会いや体験を通して“人間になるために”そして“私達は神の子として今生きている”と話された。参加者は6グループに分かれ、テーマを基に意見交換し、分かち合った後、各グループ発表し全体会で共通理解の場を持った。最後にイルダヤラージ師がみ言葉の祭儀を司式した後閉会した。来年度は愛媛地区で開催予定。

結城了雪祭
嘘と死の文化の中でイエスを証する困難

7月7日、今年もまた阿南教会で結城了雪祭が催された。

今年は例年のように講演は行われず「現代を生きる殉教」というテーマのもと、分かち合いがもたれた。それに先立ち、諏訪司教がイエズス会のジョン・A・ハードン神父の「私達の時代・殉教の時代」という文章を紹介された。

この時代、私達には血を流す殉教は与えられないが、証による殉教という、より困難な時代に生きている。まず世俗的な喜びという価値観のもとに政治、経済、文化は形作られてきた。嘘と死の文化の真っ只中にあってイエスを証するということは殉教者となる事に他ならない。

周囲の人々の反対や無関心、連帯の無い孤独な生き方が蔓延する中にあって、くじけそうになる私達をマザーテレサは励ましています。「気にすることなくやりなさい」と。司教様は貧しい人々をいただく新教皇フランシスコの誕生に喜びと期待をもって話を終えられた。

世俗化のあらしに翻弄されている我々信徒にとって、今回の結城了雪祭はイエスの証人になるというクリスチャンの本質を真剣に考えさせられた集いとなった。

私達はこの孤独を生きなければならないが、信仰共同体に支えられ、お互いに励まし合って頑張りましょう。力は聖霊が与えてくれます。

阿南教会　渡部康雄

与えられた感動の時
右近祭に寄せて

小豆島への憧憬というか、それに似た感慨に憑かれたように心動かされて、残された時間を此処で過ごせるならば、心地よい終焉の地になるのではと、そう思い込むのには造作はなかった。それは去年のゴールデンウィークだった。四国にある城、丸亀城、松山城、高知城を巡り、取って返して高松へ。会話の中で、小豆島へ渡るのは難しいだろうとの妻の問いに、高松から船で1時間くらいだろうということで、じゃ、寄って24の瞳の学校へ行ってみたいと、土庄港に初上陸した。案内図通り、道を登ると海が見える辺りで高い真っ白な十字架が目に飛び込んできた。予想だにしなかった光景に私は大変驚いた。小豆島にカトリックの信徒が、ましてや教会や修道院までもが存在するなど、夢想だにしなかった。

妻が教会暦で探してみると、れっきとして在るではないか。自分の無知に恥じ入ると共に、ある感動に包まれた。何よりも４００余年もの昔に、これも何と１４００人もの人々が今の私たちと同じ父である神に憧れ、その生命に入るために、無条件にこの世の物すべてを差し置いて暮らしていたとは。その道を最優先に生き抜くべきと、聖霊の導きと御父の恵み深き賜物を選んだのだ。その知恵ある選択と決断の潔さに感動の涙を禁じ得ない感動の時を与え有られたのだった。

小豆島教会　梅田司

小豆島にある右近ゆかりの地など

告　知　板

第55回日本カトリック看護協会
全国大会in仙台
「大震災を乗り越え復興に向かって」
生かされているいのちのわかちあい

期　日：2013年10月25日（金）～26日（土）
場　所：仙台
会　場：25日 ホテル法華クラブ仙台
　　26日 カトリック元寺小路教会
主　催：日本カトリック看護協会
担　当：仙台支部

～ 夫婦のつどい ～
「分かち合いを通して夫婦の関わりを見直し、絆を深めませんか」
ご夫婦は勿論、お一人でも参加出来ます！

期　日　9月28日（土）13:30～16:30
場　所　カトリック桜町教会

新　刊　書　籍　紹　介

■イエスの教えてくれた祈り

―雨宮慧神父推薦―
「本書は聖書学的な知見という土台の上に立った沈黙へと我々を導いてくれる」
ミラノの大司教であり世界的な聖書学者でもあったマルティーニ枢機卿が病院や刑務所、修道院、小教区で行った「主の祈り」についての司牧的講話―個人的沈黙と社会的黙想を統合した名著。
カルロ・マリア・マルティーニ 著
篠崎榮、レナト・フィリピーニ 訳
四六判　並製110ページ　教友社
￥1050（税込）
＊ご注文は是非レナト神父迄！

■薩摩のベルナルドの生涯
初めてヨーロッパに行った日本人

「ベルナルドは聖人のように死にました。自分の死をとおしても、全ての人々を善導したのです」（死の1年後に書かれた手紙）、「もし初代教会のキリスト教徒が生きているとしたら、このような人であるだろう」（ベルナルドと親しかったリバデネイラ神父）
ホアン・カトレット　ホセ・マリア・カトレット/絵　高橋敦子/訳
出版社：　教友社　価格：1,050円（税込）

医療法人社団聖心会　阪本病院
わたしたちは、患者様の立場に立った全人医療を行い、地域の皆様に愛され信頼される病院を目指します
院内保育園完備

整形外科・脳神経外科・泌尿器科
皮膚科・外科・消化器外科
肛門外科・乳腺外科・形成外科
呼吸器外科・呼吸器内科・内科
リウマチ科・放射線科・リハビリテーション科・麻酔科
〒769-2602
香川県東かがわ市川東103-1
☎0879-25-1121（代）
http://www.idm-hcg.co.jp/sakamoto/

私たちは、自分を創造しようとするこどもをまなび、護りましょう
暁　の　星　学　園
鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園